

帝国の「中心都市」プラハ

薩摩秀登

はじめに

チエコの首都プラハは、九世紀から十世紀にかけて
ブシェミスル家による統一国家が成立して以来、常に
その中心都市の地位にあった。ヴルタヴァ川左岸にあ
るプラハ城はブシェミスル家の国家の政治的中枢であ
つたが、九六七年にその城内の聖ヴィート大聖堂にチ
エコで最初の司教座が置かれたことによつて、ここは
また宗教的中心にもなつた。そして城のすぐ下のヴル
タヴァ川渡河地点を中心に広がる集落は、チエコのほ
ぼ中央という位置も幸いして、人々物資の集まる最も
重要な都市として発展した。

さらにこの都市はルクセンブルク家の二人のドイツ
王カール（チエコ語名カレル）四世（在位一三四六
～一三七八年）及びヴェンツェル（チエコ語名ヴァー
ツラフ、在位一三七八～一四〇〇年）のもとで、神聖
ローマ帝国の中心としても位置付けられた。カール四
世時代のプラハの人口は三万人から四万人と推定され
ており、当時のアルプス以北の都市の中では最大規模
であった。単に人口が多かつたばかりでなく、一四世
紀のプラハでは帝国の「首都」にふさわしい内実と外
観を備えるべく、多くの試みがなされている。

しかしこうした繁栄の時代のすぐ後、一五世紀のプラハはフス派戦争（一四一九～一四三四）時代を迎

える。カトリック教会側から見れば「異端」であったフス派は、一四世紀末から一五世紀にかけてチェコの社会が抱えていた様々な矛盾に対する、プラハの住民を中心とした対応が一つのきっかけとなって生まれた宗派であった。またフス派運動の背景には一種の民族的反感、すなわちチエコ人とドイツ人の対立という要素が明らかに見られるが、これも数百年にわたるチエコ人とドイツ人の共住の結果であり、その影響が最もはつきりと現われたのがプラハという都市だったのである。

このように一四世紀から一五世紀初頭のプラハは、中欧随一の大都市として発展するという一侧面を見せつづ、その後に中世後期ヨーロッパで最大の宗教的、「民族」的要素の入り混じった闘争の舞台となつたという点で、他のヨーロッパ諸都市に見られない独特な展開を見せている。そこで本稿では、こうしたプラハの「中心都市」としての性格が実際にどのように形づくられ、それが市民にどのような影響を及ぼしたかを考えてみることにする。⁽²⁾

一 チェコ王国におけるプラハの位置

チェコ王国では一三世紀の二〇年代から、植民活動によって急速に都市網が形成されていった。それらの中には世俗貴族が自分の所領に建設した都市もあるが、その後の市民の政治的活動は市の領域内部に限られていき、国政にはほとんど関与していない。

この点でやや例外的なのは、プラハと、銀鉱を中心的に急速に発展したクトナー・ホラであった。この二都市の代表は、ブシェミスル家断絶(一三〇六年)後、ルクセンブルク家をチェコ王に招くための外交交渉に、高位聖職者や世俗貴族とともに参加している。その後も、ヨハン(在位一三一〇—一三四六年)が貴族たちと対立し、その権力が安定しないのを見たプラハの有力市民たちは、一三一九年に一部の貴族と結んで公然と王に対して反抗する態度を見せた。⁽⁴⁾この企ては失敗に終つたが、王がチェコ国内では権力を確立できなか

つたヨハンの時代は、王権からの都市の「解放」がある程度進んだ時期と考えてよいだろう。国王都市に対する王領地管理官(*subcamerarius, podkomor*)の権利を制限した一三三七年のヨハンの証書⁽⁵⁾は、プラハには直接関係ないが、「筆頭の」都市であつたプラハも同様に自立性を高めたことは推測し得る。王が実質不在であったヨハンの時代には、貴族たちがプラハに集まつて国政を掌握しており、市民が閑与する余地を与えたが、しかし貴族たちも都市の内部問題にまでは介入することができなかつた。

しかしカール四世になると事情は一変し、国王権力が安定へと向かう。それに従つてプラハの地位も比較的安定するようになつたが、しかし王権による都市の管理もそれまでよりずっと厳しいものとなつた。プラハ(旧市街)、クトナー・ホラのほか、一三二〇年代に帝国都市からチエコ王国に編入されたヘブと、一三四八年にカールによって創設されたプラハ新市街を含めた四都市は、国王都市の中でも特別の地位にあり、王領地管理官の管轄外に置かれ、王が直接掌握する形

になつていた。プラハ旧市街では一四世紀後半になって参審人団体から参事会が独立するが、そのメンバーは市民によつて選出される建前になつていたものの、実際には王の意向で決められていた。参事会の権限はほとんど市内だけに限られ、そうした状態はフス派戦争勃発まで続いたのであつた。

以上のようにプラハの新・旧両市街は、国王都市の中でも特別な地位を認められていながら、王権との深い結びつきのためにその影響を直接に被ることは避けられなかつた。チエコ王、ドイツ王、皇帝を兼ねたカ

ール四世はこのプラハを拠点に帝國政策を展開していくことになる。⁽⁶⁾ そうした彼の活動がどのような変化をプラハにもたらしたかを次に見てみたい。

二 帝国の中心としてのプラハ

カールはすでに一三四四年に教皇クレメンス六世との交渉によつてプラハ司教座を大司教座に格上げし、四百年近く続いたマインツ大司教座との結びつきを絶つた。同時に聖ヴィート大聖堂のゴシック様式による

建て替えが始められ、チェコの教会の威信を示すことになった。さらに一三四八年にはやはり教皇の認可に基づいてプラハに中欧で初の大学が創られた。パリ大学と同じく四学部によって構成されるこの大学は、皇帝の居所であるプラハの権威を高め、広くドイツの各地域からも多数の学生を集めた。同じく一三四八年にはプラハ新市街が創設されている。これによってプラハの市街地面積は一挙に三倍に広がった。旧市街と新市街は完全に独立した二つの都市であり、それぞれに参事会があり、両者は城壁で隔てられていた。新市街の城壁と市街地の建設は短期間のうちに進められた。カールは大きな商館の立ち並ぶ商業都市建設を考えていたらしいが、実際には新市街の住民には手工業者が多かったといわれる。

また一三四八年にはプラハ近郊に、帝冠や宝物を收めるための場所としてカルルシュテイン城の建設が始められた。

新しい聖ヴィート大聖堂には、チェコの代表的聖人である聖ヴァーツラフ(ヴェンツエル)に捧げられた

ものが一四世紀の独特な性格を帶びているので、「中心的機能」もまた当時の条件に合わせて捉えられなければならない。特に留意するべき点としてモラフは、①一箇所の宮廷による支配 *Residenzherrschaft* と、移動しながらの支配 *Reiseherrschaft* とは大きな違いではないこと、②皇帝の意志がどのような手段と方法で伝達されたかを見るべきであること、③特別に中心形成的作用をもたらすものとして宮廷議会と帝国議会があるが、この両者は當時まだほとんど区別されていなかったことをあげる。特に③は、チェコではブシェミスル家時代も含めて一度も帝国議会が開かれていないことを考えた場合、プラハの中心的機能を判断するために重要な点である。これに関連して、チェコ王国統治と帝国統治がカールとその周辺人物たちによってどの程度区別されていたか、あるいはいかつたかという問題も生じるが、この点は別の機会に譲ることにして、ここではモラフの分析に従ってプラハの中心的機能を示すいくつかの事実に触れておこう。

カールの時代には、帝国統治の軸となる東西の線が

特別の礼拝堂が備えられ、ルクセンブルク家が帝冠とともに伝統的なチェコ王冠をも受け継いでいることを象徴した。また、新市街のポトスカリエ地区に新設されたベネディクト派修道院とされ、ダルマティアの修道士たちが呼び寄せられた。カールの抱いていたプランによれば、帝国は「スラヴ語」世界に対しても開かれた影響力を持つべきものであった。

そしてその帝国の中心として位置付けられたのがチエコ王国の首都プラハであった。父ヨハンと違って、カールで生まれて幼年時代を過ごした経験を持ち、またチエコ王即位以前からモラヴィア辺境伯としてチエコ王国の政治に関わってきたカールは、チエコだけではなく帝国統治の重点をもプラハに置くことを考えていた⁽⁷⁾。

では実際にカールの時代に、プラハはどの程度まで帝国の中心として機能したのか。これをP・モラフは皇帝自身および宮廷関係者たちの行動を跡付けることによって分析した⁽⁸⁾。当然ながら、帝国統治の概念その

存在した。その西端はフランクフルト・アム・マイン、東端は現ボーランド領のヴロツワフ(ブレスラウ)で、ニュルンベルクとプラハがこの軸上の二大中心点となる。カールは在位期間三十二年のうち九年から十年をプラハで過ごし(ただしカルルシュテインなど周辺の城も含む)、一年半から三年をニュルンベルクで過ごしている。ヴロツワフ滞在期間はプラハのほぼ十分の一、フランクフルト滞在期間はニュルンベルクのほぼ十分の一である。これだけでカールの在位期間のほぼ半分に達するが、残りの半分は帝国の外も含めた非常に多くの場所を移動しており、四百三十八箇所の滞在が証明できる。これが、カールにとってプラハが「本拠」であった事実を際立たせる⁽⁹⁾。しかし同時にニュルンベルクの地位も劣らず重要であり、財政、外交、軍事などの分野ではむしろこちらの方が中心であったことも見逃せない。

宮廷での活動のためにプラハに長期間滞在した人物は、カールの発行した証書の内容や証人リストから突きとめられる。チエコ王国に属する諸侯(ヴロツワフ、

オロモウツ、リトミ・シュルの各司教、モラヴィア辺境伯、オパヴァ大公)およびチェコとモラヴィアの有力貴族たちは、宮廷に出向いていただけでなく、プラハ滞在用の住居をも構えていた。

チェコ王国以外の諸侯でも、プラハにある程度長期間滞在している例が見られるが、モラフはこれらの人々が①選挙侯、②「王に近い」地域の諸侯、③チェコのヘゲモニーのもとにある地域の諸侯、のどれかに必ずあってはまるとしている。①ではマインツ大司教が(恐らく選挙侯中の首位者として)宮廷に滞在する期間が最も長い。②に含まれるのはフランケン、シュヴァーベン、エルベ中流域の伯たちであるが、彼らはプラハに住居は構えず、宮廷に滞在してその費用を皇帝から支給された。③でいう「チェコのヘゲモニー」は、あくまで皇帝カールの統率力によって一時的に成り立つたものだが、このヘゲモニーのもとにあった諸侯としては、ザクセン・ヴィッテンベルクの選挙侯が代表的であるという。モラフは、やや誇張であると断つた上で、プラハがこの選挙侯にとつても本拠

はドイツに関しても同じような資格が与えられた。彼に委ねられた権利は、帝国都市やユダヤ人からの税徴収も含むものであった。そして彼はこの活動のために、プラハに独立した尚書局 Kanzlei を備えていた。この尚書局は彼の活動期間中だけ存在したものであって、その意味では個人的組織であったが、カールがプラハにいない間も活動を続けていた点が注目され、移動する宮廷の一種の「支部 Außenstation」的な性格を持つていた。その職掌の及ぶ範囲は王領地からチェコ以外の帝国各地にまで及んでおり、行政官、財政担当者としてのディートリヒは、短い期間、王領地、「王に近い」地域、チェコのヘゲモニーのもとにある地域の区別を薄れさせたといえる。⁽¹¹⁾

またドイツ王の宮廷裁判所はほぼ王とともに移動しながら、プラハでも、チェコ以外の都市でも開かれた。宮廷裁判官として最も重要だったのはシュレジエンの大公たちであったが、彼らはほとんどカールと行動をともにしている。

財務局 Kammer に関してはあまり詳しくはわかつ

Hauptresidenz であったと述べている。⁽¹⁰⁾以上のようないいとしながらも、モラフは宮廷財務局の中核にいた人物たちの中にニュルンベルクなどの出身の市民たちが多く、互いに密な関係を結び合っていたことを指摘している。⁽¹²⁾

このように帝国の「要人」たちが集まつたことの波及効果として、プラハでは様々な経済活動がこれまでになく刺激されたことは容易に想像できる。

以上、モラフの指摘をいくつか紹介し、プラハが帝国の中心としての機能をどの程度果たしていたかを見てきた。モラフは、プラハの中心的機能が帝国全体に及んだわけではなく、中心を必要とした地域、そして王が政治的立場を主張できた地域に限られるとしながらも、カール時代のプラハには帝国の中心としての機能が認められるとしている。そしてカールの権力が絶頂にあつた一三六〇年前後には、ルクセンブルク家の権力の拡張、ヘゲモニーの強化、王領地の拡大、場合によつてはレーエンの充実という形で、帝国の構造を徐々に改革する機会は訪れていた。それはいわば、チ

プラハの「中心的」性格と、カールが長期の交渉の後に帝國の広い地域へと拡大させる意図を持つていたことが読み取れる。その広がりは今日中欧と呼ばれる地域と一部重なっているといえるだろう。

次にプラハが帝國で何らかの制度的な中心の役割を果たしたかどうかであるが、モラフは、中世後期にはまだ制度の働き自体が個人の活動に基づくものであったことを強調し、カールと本来個人的には無関係でありながらプラハで勤務した人物をあげる。代表的なのが、サレプタ、シュレスヴィヒ、ミンデン、マクデブルクなどの司教を歴任したシトー会士ディートリヒ・フォン・ボルティツである。彼は一三五七年三月二日より少し前にチェコ王国の収入すべてを抵当として委嘱された。一三六二年に決算が行なわれるまで王国の財政をほぼ一手に引き受けている。さらに一三六〇年に

王支配地域に転化するという方法であった。もちろんこれが仮にも実現するためにはきわめて長い時間が必要なはずであり、結局はカールの時代にほんのわずかな可能性を示しただけで終ってしまったわけである。

カールのプランにとって妨げとなつた要因としてモラフは①チエコの貴族たちが中央権力の切り崩しを図つたこと、②チエコ人としての独自な自覚 *Eigenbewußtsein* の存在という二点を指摘している。⁽¹³⁾さらにそれ以外にも、プラハには帝国の中心としては明らかに不適格な要素がいくつか備わっていた。次にこれらの点を簡単に検討していきたい。

三 「中心都市」の矛盾

プラハが帝国の中心としての機能を与えられることによって、チエコ王国以外の出身者、特にドイツ人の数が増えたことは間違いない。しかしプラハあるいはチエコ王国全体が、すでに一四世紀に入る前から、チエコ人とドイツ人の共住地域という性格を持っていた。それでも、単に言語や習慣が異なる人々が同じ地域に

重要な争点の一つになつていた。

これに対してチエコに住むドイツ人の中には貴族は少なかつた。カール四世時代にも、他所からチエコに来て「永住」した貴族は多くない。カール自身がチエコ人貴族の感情を配慮した結果とも考えられるが、いずれにせよチエコ人貴族たちから帝国出身者たちが潜在的不信感を持つて見られているような状況では、プラハは帝国の中心としては不向きであつたと言わざるをえない。ただしこの問題は、チエコ統治と帝国統治がどの程度区別されていたかという、前にも指摘した問題と合わせて考える必要があるだろう。

チエコ人とドイツ人の対抗関係は、都市内部でも生じる可能性があった。その背景としては、圧倒的にドイツ人の多い富裕な商人層と、チエコ人の多い手工業者層との対抗が通常考えられてきた。しかしこの二種類の対抗関係を単純に重ね合わせることには問題があり、しかもプラハでは一四世紀半ばに大きな争いもなく手工業者が市政に進出している。そのため、市民の間の政治権力闘争といったものに「民族」の対立が

住むだけでは、反発感情は生まれない。特にチエコ王国に何世代も住んでいたドイツ系住民の間では、言語的帰属よりも出身に基づいて、自分をチエコ人とみなす傾向もあつたといわれる。⁽¹⁴⁾

しかし一四世紀初頭には、「通称ダリミルの年代記」に見られるように、チエコ人貴族の間にドイツ人にに対する激しい憎悪があつたことも事実である。この憎悪の源は、富裕なドイツ人商人たちがプラハなどの都市に住んで様々な特権を享受し、新たな慣習を持ちこみ、伝統的な貴族の地位を脅かしていることにあつた。從つてこの年代記の作者の憎悪は、トーナメントなど異国遊びにうつつをぬかす「最近の貴族たち」にも、同様に向けられている。

このように、一種の民族的意識と言えるものを最初に明確な形で作り出したのが、自分たちの特権的地位を危ういと感じた世俗の貴族たちであつたことは、グラウスが特に強調するところである。⁽¹⁵⁾一三一〇年代にヨハンと貴族との間で起つた激しい闘争においても、「外国人」を国政の最高官職につけてよいかどうかが

絡むという可能性は、実際にはほとんどなかつたようと思われる。

プラハ独特の構造としては、旧市街と新市街の対抗関係という要素も加わる。大雑把に言って旧市街ではドイツ人、新市街ではチエコ人が優勢であったのは確かだが、二つの市の対抗関係が単純な「民族的」反発に帰せられるものではなかつたことはいうまでもない。ここでは、プラハの中心的機能のもう一つの結果として、ここが都市の本来の経済力に比べて過度に人口の集中した街になり、それが市民の生活にも強い影響を及ぼしたという点に注目してみたい。グラウスは一九四九年に出版された『フス派以前の都市貧民』で、一四世紀後半から一五世紀にかけてのプラハがかなり多くの「貧民 chudina」を抱えた街であり、しかもその生活はしだいに悪化する傾向にあつたことを示した。⁽¹⁶⁾この研究は、都市が都市貴族（商人）と手工業者との二つの部分から成り立つていたとするメンドルらの研究を修正したものであるが、ここではプラハが特に多くの貧しい労働者などを抱えた都市であったことを

示すいくつかの例を紹介するにとどめよう。

だらうと推測している。⁽²⁰⁾

聖ヴィート大聖堂の建設に際して支払われた賃金の一覧によれば、車を曳いたりクレーン用の車輪を回したりする日雇い労働者の数は、農村が収穫を迎える時期になつても減つていらないという。またプラハのすぐ近郊にある教会所領で、刈取り、養魚池掘り、乾草刈りなどのために雇われた労働者の賃金は、聖ヴィート大聖堂建設のために雇われた労働者の賃金よりわずかに高い。また建設現場における熟練労働者（左官など）と非熟練労働者の賃金の比率を、プラハとウイーン（聖シュテファン大聖堂の建設）で比較すると、プラハでは両者の格差が大きく、明らかに非熟練労働者に不利であったことがわかる。（⁽¹⁹⁾ プラハとヘプと比べても同様である。）

実際に「貧民」が都市人口のどの位の割合を占めたかは確定できない。しかしがラウスは、ブルノで一五六五年に市に税を支払っていない人の割合が四一%であつたというメンドルの研究を引用し、人口の稠密性が高かつたプラハではその割合はこれよりも高かつた

半ばのプラハに集中した人口が、市の持つてゐる経済的許容力を越えたものであつことはほぼ間違いないであろう。この事情は、新市街の建設がほぼ終り、またカールの死後に景気が後退し、聖ヴィート大聖堂などを初めとする大がかりな建築活動が鈍つたことによって、さらに深刻になった。

プラハの経済的発展には初めからいくつの限界があつたことが指摘されている。ヨーロッパを東西南北に結ぶ商業ルートは、山地に囲まれたチエコを避けるのが普通であった。この点をよく知つていたカールは、ヴェネツィア商人に、戦乱の危険のあつたフランス方

面を避けて、プラハを経由してバルト海方面へ向かうルートを提案した。そのためにドナウ川とブルタヴァ川をつなぐ運河の建設まで計画されたが、実現には至らなかつた。またプラハは基本的に「消費都市」であり、輸出にあてられるだけの重要な産業がなかつたため、商業基地としての発展の道が閉ざされていたことは特に致命的であった。

この時代のプラハの性格を示すもう一つの重要な点は、周辺の農村を含めた都市支配領域形成が行なわれなかつたことである。その原因については現在のところ充分には説明されていないと思われるが、二つの点を指摘しておきたい。まずチエコでは伝統的に土地に対する王の所有権の観念が強く、王領地に建設された都市の支配権は、市壁の外には及びにくかったと思われる。次にカール四世の時代において、プラハの経済的発展は王も望むところであったが、プラハ自身が一つの支配領域を形成することは、帝国の中心であり王の居所でもある都市という性格と、両立しにくい側面があつたのではないだろうか。プラハの富裕な商人層

は、財産ができると、農村部に所領を買い求めて自ら貴族化していく道を選んだのであった。

以上のように、一四世紀のプラハは王国および帝国の中心都市として位置付けられ、それにふさわしい政治的、文化的重要性を一時は備えたが、社会的、経済的にはそれに見合うだけの強固な基盤を持つていなかつた。王によって設定された「中心的機能」は、都市自体の発展を促進することにはならず、むしろそれを抑えることにもなりかねなつた。そしてプラハはヴェンツィエルの時代に入つて中心としての性格が希薄になり、さらに一四〇〇年のヴェンツィエルのドイツ王廃位によって、帝国の中心からチエコという一王国の首都の地位に転落することにより、一層深刻な事態を迎えることになつたのである。

本稿の対象外であるが、こうしたプラハの矛盾、特に大量の「貧民」の存在が、フス派運動を生み出す大きな要因になつっていたことはいうまでもない。グラウスは、一三八九年、一四一九年、一四二二年の三度にわたるプラハの民衆暴動の分析を行ない、これらがい

されずト慶此によく暴動であったと述べてゐる。や

し、一回1111年の健健フス派に対する暴動では、ト慶

民を命じた健健フス派が一時的に市政を掌握したが、そ

れを維持するにはできなかつた点などを指摘し、暴

動が社会に与えた影響の大きさを出し、市民の構造

の「機能」はもとのままであつた点を強調している⁽²³⁾。

せだ、一回110年、逃亡したカトリック系市民の財産が没収された時、市民は市壁外の財産の獲得に走り、結果として財産所有者は交換したが、都市の支配を確立したり、市構造を改めるための努力はなされなかつたところ、指摘も重要である。⁽²⁴⁾ した側面に注目するならば、カール四世即位以来のフス派が抱えていた矛盾は、フス派運動による基本的には解決しなかつた点であると言ふべきだ。

- (1) J. Mezník, Der ökonomische Charakter Prags im 14. Jahrhundert, in Historica 17 (1969), p. 47.

- (2) プラハ歴史文書 V. V. Tomek, Dějepis města Prahy 3-5, Praha 1875 ff. J. Janáček, Dějiny Prahy, Praha 1964.

(3) 市民ナショナルの地位の変遷、「提携」「市民ナショナル」における市民の地位——裁判権を中心とした「『政治大学教養論集』、社会統治、人文科学』11回(1991年)——」『政治大学教養論集』、社会統治、人文科学』11回(1991年)——

(4) 提携『王權と貴族、市民ナショナルの市民の國家』、日本ナショナル・スクール出版局、1991年、兼

「II章、市民権」。

- (5) Codex iuris municipalis Bohemiae I. ed. J. Čelakovský, Praha 1886, no. 29, II. ed. J. Čelakovský, Praha 1895, no. 199, no. 200.

- (6) カール四世即位の後から14世紀、市民の社會や市民の組織など多くの組織が成立。J. Spěváček, Úloha Historica Bohemica 10 (1986), p. 137-171; J. Mezník, Karel IV., patriciat a cechy, in Československý časopis historický 13 (1965), p. 202-217.

- (7) ベルナート・ツィッカ、カール四世のヨーロッパの思想家 J. Spěváček, Prag zwischen West- und Osteuropa im Zeitalter der Luxemburger, in Historica 30 (1990), p. 5-27.

- (8) P. Moraw, Zur Mittelpunktfunktion Prags im Zeitalter Karls IV., in Europa Slavica-Europa

Orientalis, Festschrift für Herbert Lüdat, Berlin 1980, p. 445-489. ここで記述される市民の役割は多。

(9) ibid., p. 454 ff.

(10) ibid., p. 461 ff.

(11) ibid., p. 469 ff.

(12) ibid., p. 476 ff.

(13) ibid., p. 488 ff.

(14) ドルニツキ市長 Peter von Zittau、14世紀の市民の役職やその他の職務による市民の役割は、市民の「人々」と定義される。市民の職業や役人としての職務は、より重要な職務よりも低いものと見なされる。

(15) B. Mendl, Hospodářské a sociální poměry v městech Pražských v letech 1378-1434, in Český časopis historický 92 (1916).

(16) F. Graus, Městská chudina, p. 38, p. 77-78.

(17) ibid., p. 87.

(18) ibid., p. 81-84.

(19) F. Graus, Prag als Mitte Böhmens 1346-1421, in Mittelalterliche Stadtgeschichtsforschung A/8, hrsg. von Emil Meynen, Köln/Wien 1979, p. 22-47.

(20) F. Graus, Struktur und Geschichte. Drei Volksaufstände im mittelalterlichen Prag, Vorträge und Forschungen, Sonderband 7, Sigmaringen 1971: p. 72-73, p. 92.

(21) F. Graus, Prag als Mitte, p. 41-42.

(22) (墨) 大学論叢(論叢)

- (159) 帝国の「中心都市」プラハ
Praha 1949. プラハ市立図書館「提携」